

観心寺・金剛寺と南北朝の動乱

元河内長野市教育委員会

尾谷 雅彦

はじめに

観心寺・金剛寺は、大阪府の東南部、河内長野市に所在する名刹である。古代から長い歴史を有し、特に中世史の宝庫であり、南北朝内乱期における両寺院の果たした役割は歴史上大きいものである。

① 観心寺について

山号は檜尾山、宗派は高野山真言宗で遺跡本山、本尊は如意輪観音坐像、鎮守は訶梨帝母天堂

創建は文武天皇大宝元年に役小角により雲心寺として開かれた。その後、平安時代に空海が弘仁6年(815)に再興し雲心寺から観心寺と改名した。伽藍は空海が弘仁7年(827)に弟子実恵に託し、実恵は弟子真紹に造営させた。自身も天長4年(827)に移り住み斉衡元年(854)に伽藍完成。貞観11年(869)に清和天皇の勅願定額寺となる。全国に荘園を持ち子院が40以上の一山寺院。国宝3件、重要文化財35件。

② 金剛寺について

山号は天野山、宗派は真言宗御室派で大本山、本尊は大日如来坐像、鎮守は高野丹生・水分社

創建は奈良時代聖武天皇の勅願により行基が開いたとされる。平安時代になって和泉国出身阿観が承安2年(1172)に空海の御影を御影堂に安置し御影供を始め、高野・丹生明神を勧請。治承2年(1178年)に金堂を建立。同年八條女院(後白河上皇の妹)の祈願所(女人高野)。治承4年源(三善)貞弘が天野谷を寄進。典型的な後白河院政期から興隆する寺院。子院70以上から構成される一山寺院。文化財は国宝5件、重要文化財29件(22棟で1件)



1 南北朝のはじまり

1-1 後醍醐天皇の不满と幕府の失政

後醍醐天皇は、幕府が提案する持明院統・大覚寺統両統迭立の皇位継承をよしとせず、さらに大覚寺統内での甥(邦良)への継承もよしとせず、自分の皇統に継承しようとした。そのためには幕府を排除するしかないとして倒幕計画を進めた。一方、元寇以後の幕府失政により金融経済による御家人の困窮、荘園既得権を奪われた公家・寺社勢力の不满が高まっていた。

1-2 討幕へ

後醍醐天皇は正中元年（1324）に討幕挙兵を試みるが未遂。嘉暦元年（1326）ころから幕府調伏の祈祷をみずから行う。元弘元年（1331）再び笠置山で挙兵し失敗（元弘の乱）。翌年隠岐に配流。後醍醐天皇に代わり持明院統の光厳天皇が踐祚。

元弘2年・正慶元年（1332）秋頃から護良親王（後醍醐天皇第三皇子）・楠木正成が畿内各地で討幕の戦いを展開し、連戦連勝。特に楠木正成の赤坂・千早城での100日間の籠城戦は、幕府軍の中に厭戦気分が広がり、この間に反幕府勢力が台頭し、伯耆の名和長年による後醍醐天皇の隠岐脱出。足利高氏による六波羅探題滅亡。新田義貞による鎌倉幕府滅亡へと連鎖。

金剛寺 元弘2年(1333) 楠木正成自筆文書 戦勝祈祷の巻数に対する礼状

金剛寺 元弘3年(1334) 護良親王播磨国西河井庄を寄進

1-3 建武新政

元弘3年（1334）6月5日、後醍醐天皇は都に還幸し、光厳天皇の在位、元号、人事を否定。そして早急に親政（政治・軍事を把握）を開始し、従来の貴族、武士社会の先例、慣習を無視。結果として、多くの反発を生み出す。

観心寺 後醍醐天皇不動明王を念持仏とする。元弘3年(1334)10月26日滝覚坊宛、楠木正成自筆書状、同年10月25日後醍醐天皇綸旨、同年10月26日観心寺宛、楠木正成自筆綸旨添状

1-4 足利尊氏の挙兵

建武2年（1335）武士の求心となった源氏の棟梁、足利尊氏が1月に中先代の乱で弟直義救援と鎌倉奪還そして挙兵（直義幽閉中の護良親王を殺める）。建武3年（1336）西上した尊氏は2月に京都近郊で敗れ、九州へ引き、5月には反攻し、湊川で迎え撃った後醍醐天皇方が敗れ、楠木正成が戦死。後醍醐天皇は叡山に行幸。この間、尊氏は自分の戦いを正当化するため光厳上皇から院宣を獲得、光明天皇を擁立。

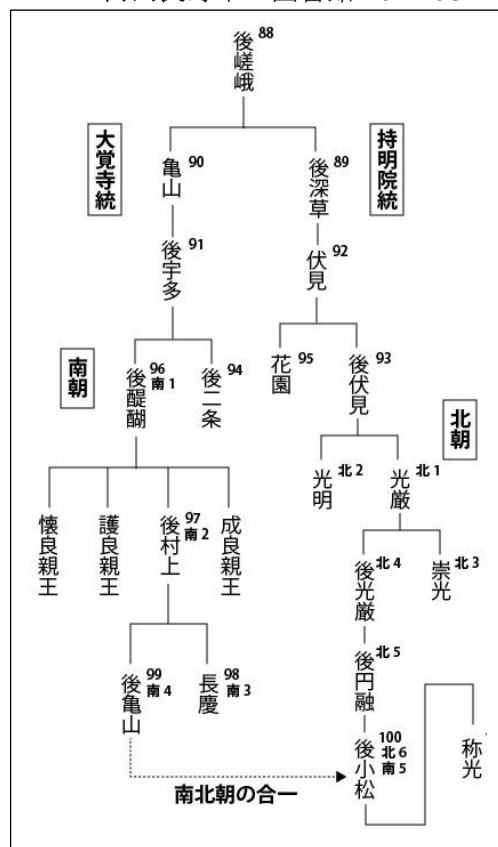
2 南北朝の幕開け

2-1 「一天両帝、南北京」

延元元年・建武3年（1336年）11月後醍醐天皇は比叡山から還幸して尊氏と和睦。8月光明天皇に神器を譲与。しかし12月吉野に潜幸し、朝廷を開き持明院統の京の朝廷と併立する「一天両帝、南北京」の南北朝時代がはじまる。

2-2 南朝の劣勢

南近畿の山地が南朝の勢力範囲となった。そして楠木正成亡き後の楠木一族の勢力範囲でもある南大阪は、逆に武家方（足利氏・足利幕府）に対する前進基地となり、延元2年・建武4年（1337）から攻防が繰り広げられた。この間、南朝（宮方）は延元3年・建武5



年（1338）に東国から軍を率いてきた北畠顕家（鎮守府将軍）が戦死、北陸にいた新田義貞も戦死、軍事的に劣勢に立たされた。この年、足利尊氏が征夷大将軍。

金剛寺 延元元年・建武3年(1336)勅願寺。延元3年・建武5年(1338)和泉国和田庄領家職を施入。延元2年・建武4年(1336)「武士乱入于当寺被焼失之」

観心寺 延元元年・建武3年(1336年)座主職の称を認める。文観弘真の申出により阿闍梨三口が与えられた。延元2年・建武4年(1337)勅願寺。

3 正平一統と南朝

3-1 後醍醐天皇崩御と後村上天皇の践祚

後醍醐天皇、京を回復できずに失意のうちに延元4年・暦応2年（1339）8月16日吉野で崩御した。「王骨はたとひ南山の苔にうづもるとも、魂魄は常に北闕の天を望まんと思ふ」そして吉野にいた第七皇子？義良が践祚。南朝2代目の天皇である後村上天皇。

観心寺 延元5年・暦応3年(1340)河内国小高瀬庄領家職を祈禱料所の知行安堵(後村上天皇最初の綸旨)

3-2 南朝の蜂起

南朝の指導者北畠親房が後醍醐天皇の意志として京都回復を呼号。この時、楠木正成の子、正行が父の官職を継ぎ楠木一族を率い、宮方の軍事的中核となる。

しかし、正平3年・貞和4年（1348）楠木正行は正月に武家方高師直と四条畷で戦い戦死。その後師直は吉野を攻撃、殿舎仏閣が灰燼。後村上天皇は賀名生へ潜行。

金剛寺北朝年号の使用例が増える

3-3 観応擾乱

南朝が凋落する中で、軍事の中核となる楠木一族を次に率いたのが正行の弟正儀。この凋落を止めたのが、足利家の内紛。足利幕府は足利尊氏が軍事権（執事高師直が実質軍事権を握る）、直義が政務（訴訟・公権的な支配関係）を行う二元体制であった。この両者が争い正平4年・貞和5年（1347年）に直義が謹慎、ところが尊氏が翌年、直義の養子直冬（尊氏庶子）の追討を命じたことから、直義が河内石川城で南朝に帰順し勢力を盛り返した。尊氏は直義軍に敗れ講和し、高師直・師泰が斬られた。しかし、直義と義詮（尊氏の嫡子）の対立が深まり、尊氏と義詮は正平6年・観応2年（1351年）10月24日南朝に降伏し直義追討の綸旨を得て、鎌倉に向かった直義を追うために、京都を一端放棄した。

3-4 正平一統

尊氏・義詮の降伏を受入れ正平6年・観応2年（1351年）後村上天皇は勅使を上洛させ北朝皇太子と天皇を廃止、神器を収束、観応の元号を停止し、正平に統一。

翌年、後村上天皇の還京が試みられ、賀名生から大和五條⇒河内東條⇒摂津住吉⇒摂津

金剛寺北朝年号
(経疏類奥書)

正慶元年	1332	1
正慶2年	1333	4
暦応元年	1338	1
暦応4年	1341	1
康永元年	1342	3
貞和2年	1346	1
貞和3年	1347	2
貞和4年	1348	12
応安6年	1373	2
永和2年	1376	1
永和3年	1377	1
至徳元年	1384	1
至徳4年	1387	1
嘉慶元年	1387	1
康応元年	1389	1
康応2年	1390	2
明德元年	1390	4
明德2年	1391	1

天王寺を經由して閏2月19日男山。翌日宮方の軍は京に入り義詮を追討、さらに21日には北朝光厳・光明・崇光三上皇及び直仁親王（皇太子）を男山に護送。尊氏・義詮の反攻の噂から3月4日、北朝の三上皇らは河内弘川寺に護送。その間、武家方が反攻し5月11日、後村上天皇は男山⇒大和宇陀⇒賀名生に還幸。三上皇らも6月2日に賀名生に護送され、京から女房が各一名下向。この間武家方は、女院による異例の方法で後光厳天皇の踐祚を強行。

3-5 観心寺・金剛寺の行宮

正平8年・文和2年（1353）宮方軍を率いる楠木正儀らは、武家方から離反し南朝に帰順した山名時氏や足利直冬らと連携し、京を再占領。しかし、一ヶ月ほどで撤退。

翌年3月に、賀名生の三上皇（光厳・崇光は出家し法皇）らは金剛寺の観蔵院に遷座。9月には後村上天皇が京都回復を図り、賀名生から金剛寺摩尼院に遷座。後村上天皇は光明上皇を正平10年・延文元年（1355）、崇光・光厳上皇・直仁親王を（正平12年・延文2年（1357））に帰京。

正平13年・延文3年（1358）には尊氏が没し義詮が足利幕府2代将軍となり、南朝征討の軍を動かした。翌年、楠木正儀は、武家方の金剛寺攻撃を危惧し、後村上天皇を大和国境に近い観心寺に遷した。正平15年・延文5年（1360）3月、武家方畠山国清により金剛寺が攻撃され、大門・持仏堂・坊舎30余棟を焼失。後村上天皇は観心寺から金剛山中の観音寺（大和宇智郡）に遷った。この間、京の武家方は内紛が絶えず、同年9月後村上天皇は住吉大社に行幸し、その後約8年間、行宮とした。

足利幕府内は有力守護間の抗争が続き、南北朝講和推進派の管領細川頼之・佐々木道誉・赤松則祐が政権を把握。佐々木道誉と南朝の楠木正儀と講和が進められたが、結局武家方降参を固守したため、頓挫した。さらに正平23年・応安2年（1368）に後村上天皇が崩御。

禅惠聖教奥書

「主上並持明院殿御住坐之間、寺中物窓、尚過7年、三木悉切失、坊舎破損了」

「足利方大将畠山乱入当寺、大門並諸持仏堂並坊舎三十五宇、令焼失畢」

4 南北朝統一

4-1 長慶天皇の踐祚

後村上天皇の皇子寛成（ゆたなり）が踐祚。この長慶天皇は武家方に対して強硬派であったことから、和平を進めていた楠木正儀は武家方に降った。天皇は一旦吉野に退去したが、踐祚の翌年から金剛寺を行宮。しかし文中2年・応安6年（1372）の合戦に敗退し、天皇は吉野に退去。一方武家方に降った楠木正儀は、後ろ盾であった管領細川頼之の失脚により南朝に帰参し、弘和3年・永徳3年（1383）には南朝の参議（公卿）。

4-2 後亀山天皇の踐祚と南北朝統一

楠木正儀が南朝に帰参したころの弘和3年・永徳3年（1383）に長慶天皇は弟の熙成（ひろなり）後亀山天皇に譲位。元中9年・明德3年（1392）10月天皇は将軍義満の和睦提案を受諾し、大覚寺に還幸し閏12月5日に三種の神器を後小松天皇に授与し、南北両朝が合体。

観心寺は北朝年号、金剛寺は両年号を用いる例が増える。

おわりに

1 観心寺・金剛寺が南朝と結びついた要因

・地政学的要因

交通の要衝（高野街道、河泉街道など 京・摂津・河内・和泉・大和・紀伊への十字路）、南近畿山地の出入り口（宗教勢力の出入口、宗教の聖地（高野山・葛城山地、吉野、熊野三山）楠木正成一族の拠点領域

・人的要因

八条女院領の大覚寺統への伝領、後醍醐天皇護持僧である真言僧文観弘真と観心寺、金剛寺との関係（禅恵法印との師弟関係）、楠木正成一族との関係

2 観心寺・金剛寺の南朝での役割

・宗教的役割 戦勝祈願

・経済的役割 朝用分

・軍事的役割 城郭

南北朝統一後は、守護権力からの保証、経済的自立（酒（天野酒）・白炭・黒炭（坪炭）・竹・木材（天野杣）など山内物産の売買）により地方有力寺院として興隆。

参考文献

森 茂暁『南朝全史』講談社学術文庫 2020

市沢 哲『太平記を読む』吉川弘文館 2008

生駒孝臣『楠木正成・正行』戎光祥出版 2017

『楠木正成 知られざる実像に迫る』批評社 2021

資料

南朝からの主な寄進 観心寺関係				
寄進者	元号		西暦	事象
	南朝	北朝		
後醍醐天皇	元弘 3	正慶 2	1333	不動明王を念持仏に
後醍醐天皇	延元元	建武 3	1336	阿闍梨職 3 口
後醍醐天皇	延元 2	建武 4	1337	勅願寺
後村上天皇	延元 5	暦応 3	1340	河内国小高瀬庄領家職
楠木正行	興国 3	暦応 5	1342	河内国野田庄地頭職安堵
後村上天皇	興国 4	康永 2	1343	領家職安堵
後村上天皇	正平 2	貞和 3	1347	美濃国西郡庄寄進
北畠親房	正平 3	貞和 4	1348	尾張国長岡庄寄進
後村上天皇	正平 3	貞和 4	1348	河内国小高瀬庄領家職再安堵
四条隆資	正平 3	貞和 4	1348	和泉国草部庄中条領家職
後村上天皇	正平 15	延文 5	1360	愛染明王常灯料として紀伊国正税
後村上天皇	正平 15	延文 5	1360	河内国岩瀬関の代替として大庭関
長慶天皇	建徳元	応安 3	1370	和泉国鳥取庄山中関の半分
長慶天皇	建徳 2	応安 4	1371	河内国大庭関に替り中振関の知行

南朝からの主な寄進 金剛寺関係				
寄進者	元号		西暦	事象
	南朝	北朝		
護良親王	元弘 3	正慶 2	1333	播磨西葛西庄
後醍醐天皇	延元 元	建武 3	1336	勅願寺
後醍醐天皇	延元 3	建武 5	1338	和泉国和田庄領家職
後醍醐天皇	正平 2	貞和 3	1347	和泉国和田庄領家職の一部を朝用
後村上天皇	正平 9	文和 3	1354	和泉国大鳥庄・和田庄・横山庄の回復を令し、備中国草壁庄・摂津国山田庄施入
後村上天皇	正平 9	文和 3	1354	徴用された寺領を返附
後村上天皇	正平 11	延文 元	1356	灌頂堂を造営寄進
長慶天皇	正平 24	応安 2	1369	和泉国大鳥庄・和田庄の領家職

南朝関係地区

